
俺の先祖は魔術師だ

haku9

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の先祖は魔術師だ

【Nコード】

N4923V

【作者名】

hakug

【あらすじ】

今まで平和な日常を過ごしてきた氷に突然悲劇が襲う。犯人は彼にはとても信じれない人物だった。彼は犯人に復讐するために、ある人物の力を借りることに…
長い復讐の旅へと行く物語。

第一 突然の悲劇

ひやうまいやう
氷堂氷は大学生だ。

今日も一日、授業を受けていた。

彼は頭もよくスポーツだって得意であった。即ち、ちょっとした天才なのだ。

友達からはよくこう言われる。

「お前は頭もよくキレルし、スポーツだってできる。おまけに顔もいいもんだから、

とても羨ましいことだよ」

しかし、彼はどうとも思っていないかった。全て当たり前のことだと思っ

ているのである。勉強だつてやればできる。スポーツもおなじこと そう思っていた。

(まあ顔は生まれつきなんだが)

氷の家はなかなかの大富豪だ。 富も財産もあり、裕福な暮らしを得ていた。

両親はかなり厳しかった。彼にも、その妹にも。

しかし彼はそんな両親を悪くは思わなかった。

この両親だからこそ、今の自分があると思っていた。なかなかの孝行息子だつたようだ。

妹は大学生だが、彼とは違う大学にいつていた。

理由は簡単。そっちの大学のほうがイケメンが多いという噂があったから。

ばかばかしい。そんなことより勉強だろう…:といても

「お兄ちゃんつて、ほんとつままないよね」

とか言われて流されるだけだ。

こんな家庭だが、彼はとても気に入っていた。

いつまでもこんな日常が続くと思っていた……

ある日

彼はいつも通り家にかえってきた。はずだった。全然いつも通りじゃなかった。

「な…なんだこれは！！」

そこに在るはずの家が轟々と音をたてて、燃えていた。

あんなに大きな家だったのに今ではほぼ全焼している。

すでに消防隊が懸命に消火作業をしていたが火はなかなか治まらな
いようだ。

「その君！近づいちゃだめだよ！」

消防隊員の一人の男性に注意された。

「今消火作業をしているところだからね。君はこの家の人かい？」

「そうだよ！なんだよこれは！何で家に火がついてんだよ！！」

つい乱暴な口調で言ってしまった。

「落ち着いて！とりあえず危ないからここにいてください。」

そういつて男性も消火作業にいつてしまった。

氷はただ見ていることしかできなかつた。同時に悔しさ、悲しさ、怒りなどの感情が

心の中でグチャグチャになっていた。

氷はがつくりとうなだれた。

現場は、とても大きな事態となっていた。あの後に警察を呼び、今は焼けた家を捜査中だ。

妹にも連絡したがすぐには来れないようだ。

行くまでに少し、時間が掛ると言っていた。

氷はやることがなかつた。やけた家は、今警察が捜査している。事情聴取だつてもう済んだ。

そのうち聞かれることもあるだろうが、今は何もやることはない。

両親の消息も、まだ分からない。生きている事はまず無いだろう

が…

そんなことを考えていたら、誰かから電話が掛ってきた。

「誰だ？こんなときに…もしもし？」

「氷か！？ わしじゃ。大林じゃ！」

彼は大林大二郎おおばやしだいじろう。氷堂家とは繋がり深いおじさんだ。

「おじさん？ 何ですかこんな時に？」

「こんなときだからじゃろうが！ お前さんらの家が燃えたんじやろう？ 紫安しあんから聞いたわい」

今さらだが紫安とは妹のことである。彼女がおじさんに連絡したんだらう。

「それでどんな状況なんじゃ？ 警察は来てるんじやろう？」

「はい。現在捜査しているんですが、証拠が一つも出そうにないらしいです。」

そうだった。家は全焼してしまつて証拠が少ないのは分かるが一つも出ないのは少しおかしい。

警察の捜査も、もうすぐ終わりそうだ。

「そうか… 奴等がまた現われたのかもしれない…」

「…え？」

「氷わしのところに来てくれないか。詳しい話はわしの家でしたい」

「なんですか奴らって？」

「電話じゃきりがない。それにとても重要な話じゃ。紫安にもわしのところに来るようにいった。何時でもいいから来てくれ」

「…分かりました。すぐ行きます」

なんのことやら 分からないことだらけだが、とりあえずおじさんの家に行つてみることにした。

なにか分かるかもしれない…そう思いながら。

第一 突然の悲劇（後書き）

初投稿でございますがよろしく願いします。どうもhakugです。しかし今年も暑いですなあ。暑すぎて自分のもう一つのpcが壊れちゃった…

なおすのにもかなりお金と時間がかかるというのでほったらかしです（泣）

とまあ余談もここまでにして、これから連載を続けようと思っておりますが、6日にちよつと愛媛にいくので次話の投稿が少しばかり遅れそうです。ごめんなさい。

でもなるべく早く作りますんでよろしく願いします。

第二 必要なる者

おじさんとの通話の後、氷はタクシーでおじさんの家に行った。普段なら楽しいかもしれない運転手の話は全く耳に入ってこなかった。

悪いがそんな話をしている暇など無かった。

さっさと料金を払っておじさんの家に入った。

「来てくれたか氷！待っていたぞ」

おじさんが玄関で迎えてくれた。

「おじさん。俺の家を燃やした犯人を知っているんですね？」

「…ああ。確信は持てんがな」

「いったい誰なんですか？なんで俺の家を…俺の家族を…！！」

「まあこつちに来なさい。リビングに紫安もいる。話は長くなるからそこで話す」

そういつてリビングへと案内してもらった。

冷静を保てずに、自分の苛立ちをぶつけてしまった。

氷は申し訳ないと思いつながら部屋に入った。

「紫安、氷が来たぞ。じゃあこれから話を…」

「お兄ちゃん！？」

おじさんの声をかき消して彼女の声が響いた。

「家はどうなったの…？ 母さんは？ 父さんは？」

「…家は全焼した。母さんも、父さんも、たぶんもう…」

「そんな…」

部屋はしばらく静かになった。

「…なんで？ なんで私たちの家族を…？」

「わからないからここに来たんだ。誰がどんな理由で俺たちの家を狙ったのか…」

「そんなあ…」

そういつてから彼女は涙を流した。

「すまない。なんにもわからなんだ…」

「氷、紫安、辛いのはわかる。だがわしはお前たちの家を燃やした奴等に心当たりがある」

おじさんが言った。

「…そうだ。ずっと疑問に思ってたんですが、なんでそんなことを知ってるんですか？」

氷が聞いた。確かに現場にもいなかったのになんで知っているのか…？

犯人のことも気になるが聞いてみた。

「そうじゃな…わしはお前の父親に電話したんじや。そのときお前の父親から聞いたんじやよ」

「なにをですか」

「それはじゃな…」

氷堂家の火災4時間前

大林はコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

彼はもうすぐ70歳になる。

仕事を辞めて残り短いかもしれない余生を満喫して過ごしていた。すると突然電話がかかってきた。

「…はあ。くつろいでいるときにいきなりなんじや。まったく…」
文句を言いながらしぶしぶ受話器を取る。

「もしもし？」

「もしもし。大二郎か？学だ。」

彼は氷堂学^{ひむらまなぶ}。氷堂家の現当主だ。

「…なんじや！わしのリラックスタイムに電話なんぞしてきおって！」

「まあまあ、怒らないでくれ。話があるんだよ」

「そんなに大事な話なのか？」

学は大二郎の怒りを冷ましながら話した。

「ああ、聞いてくれ。今日は俺たちところに悪魔が来る日だ。俺

はもうじき…死ぬ」

いきなりそんなことを言われた。

「なんだって？悪魔！？」

「ああ、覚えてるだろう。」

あまりにも突然だったので思い出すのに少し時間がかかったが

「…もしやあのことか？」

「そうだ」

「なんとということじゃ！もうその日が来てしまったのか！！」

「そうだよ。やっと思い出したか」

「ムムム…」

学が話を続けた。

「俺の子供は頼んだぞ。あいつらならきつとできる」

「…かたき討ちをか？」

「ああ。かならず俺のかたきを取ってくれるよ。そのために何が必要か覚えてるか？」

「必要なものは何のことやら…と大二郎が思っていたら、受話器のむこうからガラスの割れる大きな音がした。

「！！おい大丈夫か！？」

「ああ。しかしじきに持たないなこれは…もうきやがった」

「…なにもしてやれずにスマン学…！どうか死なないでくれ！」

「死ぬなってか？まあせいぜいあがいてみるよ。あとは頼んだぞ…」
そういった後、電話がブツンときれた。

ゆっくり話している暇など無かったようだ。

「…くそっ！」

学を助けることはもう不可能に近かった。

だからせめて最後に言っていたこと「必要な物」を思い出さなければいけない。

「あの人の事なんじゃろうなたぶん」

とても古い本の間に挟まっていた紙をだした。

今すぐにも学の所へ行って助けてやりたいが自分の力では到底敵

わなないことを知っていた。

彼の子供、氷と紫安を待つことしかできなかった…

話を終えた大二郎が一つの紙を出した。

「これがお前たちの家族のかたき討ちに《必要な者》の居場所じゃ見たこともないような文字が書かれている。

「そんなことがあったなんて…」

氷はまだ話についていけていなかった。

「もう少し詳しく教えてくれませんか？その悪魔つてのが俺の両親を殺した。誰なんですか？何ですか！」

「詳しいことは知らん。しかしお前たちに《必要な者》が全て知っているじゃろう」

「《必要な者》？」

「ああ。」

《必要な者》 いったい誰のことなんだろうか。

「いったい誰なんですか？その《必要な者》って？」

「…お前たちの先祖、大魔術師氷堂救蘭ひょうどうくわんじゃ」

「え？」

わけが解らない。先祖？？大魔術師？？

「混乱しているのはわかるが、本当のことじゃ。お前たちの先祖は魔術師だった」

わけが解らないのは紫安も同じだった。

ずっと瞑っていた口を開いた。

「ま、魔術師！？本当にいたんだね。この世界に」

「いやいや待て！普通に考えたらおかしいだろ紫安！」

氷が必死につっこむ。

「でもいるんですよ？」

彼女はおじさんに聞いた。

「ああ。本当の話じゃよ全てな」

「でも先祖なんでしょう？、今生きてるはずないでしょう」

「…まあ生きてはいないだろうな」

だったら何の意味もないだろう。そう言おうとしたが

「眠っている。100年の間ずっと。だからお前たちがおこすんじゃないよ」

「ええ!？」

さつきから驚いてばかりだ。

「そ、そんなのありかよ…」

「つまり今までの話を簡単にすると」

氷が話す。

「俺たちの家族を襲ったのはその悪魔というやつらで俺たちの先祖、氷堂救蘭と関係のあるということ」

「ああ」

おじさんが相槌を打つ。

「そしてその先祖は大魔術師で、父さんの言っていた復讐に《必要な者》であること」

「うむ」

「そしてその紙に示されている場所に先祖が眠っている。俺たちは先祖の力を借りるためにおこしに行く」

「そんなところじゃ」

これで本当にいいのか…？まだ信じきれないが…

「でこの紙なんです…何語ですかこれ？」

「さあ何語だったかな。氷は知らんのか」

「見たことないですよこんなの」

紙切れにはこう書かれていた

???????? ? ? ? ? ? ? ? ?

???? ?????????? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

一応紫安にも聞いてみた。

すると以外にもこんなことを言った。

「…あれ、これへブライ語じゃない？」

「え？」

まさかの大当たりだった。

そのあとすっかりと翻訳し始めた。

「ええと、右から左に読むんだよ。だから…」

氷堂の山

神聖な木 ノック

「こんなふうに書いてると思うよ」

「何で読めるんだ？」

「大学で習ったからだよん」

なんか腹立つ言い方だが、助かった。

それに彼女も少し元気になったようだ。

「これが先祖の眠っている場所ですか」

「ああ。信じきれんだろうが見たほうが早いじゃろう」

百聞は一見にしかず、といったところか。

「じゃあ早速行こうよお兄ちゃん」

紫安が言う。

「…ああ。氷堂の山というのはたぶん氷堂家の所有している山なんだろう」

「山かあ。でも家は焼けちゃったから、山に行く準備もできないよ？」

「そうだよな。困った」

「わしが貸そう。氷堂の山はそれほど険しくないじゃろう。そんなに気にせんでもいい」

おじさんが言った。

「よかった。ありがとうございます」

さて、準備はととのった。

氷たちが復讐するために《必要な者》氷堂救蘭をおこす。

これが復讐への第一歩である。

二人は山へ向かうのであった…

第三 秘密の湖

彼らは山の洞窟にいた。暗くてあまり見えないが、ライトを持っていたので少しは明るくなった。

「いたた…」

どうやら上から落ちてきたらしい。

「大丈夫か紫安？」

「うん。平気だよ」

「どこだここは…洞窟みたいなものなのか？」

目の前に一本道がある。進むしかなさそうだ。

「どうしてこんなことに…」

それはほんの少し前のことだった。

「気を付けていくんじゃぞ！何ものかが襲ってくるかもしれんからな」

そうおじさんに言われたあと、2人は山に向かった。

山の名は知らないが、子供のころにこの山でよく遊んでいたものだ。どんなところかはわかってる。

「でさあ氷君、私たちはどこに行けばいいの？」

紫安がきく。

「…その氷君というのはやめる。とりあえずメモに書いてあった神木を指すぞ」

「うんわかった。でも登るのしんだいなあ」

たしかにこの山には昔から大きな木があった。

この辺りでは御神木として崇められていたようだ。

「でも本当にいるのかなご先祖様なんて」

「わからない。でも今はどこにも行くあてもない。しかたねえよ」

氷は自分の両親をとても尊敬していた。

その分犯人に対する憎しみも大きかった。

「かならず仇をとる。もう少しで着くぞ紫安」

そして登っていると、大きな木が見えてきた。これが神木だ。

「うわあ大きいね氷君。これが御神木かあ」

大きな木に縄のようなものが巻かれている。

とても神聖な木のようにだ。

「さてと、メモの内容からすればこの木をノックすればいいのか？」

「そうなんじゃないかな」

紫安が答えた。

しかし御神木をたたくというのは何かしら罰があたりそうだ。

氷は一瞬ためらったが

「…しかたねえよな。」

そういつて御神木を2回トントンとノックした。

「…あれ？反応がないよ氷君」

たしかに何も反応がない。

「…おかしいな。もつと勢いよくやるのか？」

そういつて勢いよくたたこうとした瞬間に大きな音がした。

「何！？今の音」

紫安が言ったその直後

「うわ！！」

「え、なに？…わあ！！」

二人のいた場所にいきなり大きな穴ができた。

二人はそのまま穴に落ちて行ってしまった…

穴はとても暗く、深いものだった。

上にあがるのも無理のようだ。

とりあえず進める方向に進むしかない。二人は進んだ。

「暗いね氷君。どこまで続いているのかな」

「さあな。こんなところに俺たちの先祖がいるとも思えんがな」

ここは山の中なのだろうか。

氷もこんな空洞があるのは知らなかった。

「それにしてもこんな暗い所になんか出てきたら怖いなあ…」

「大丈夫だよ。守ってやる。心配するな」

氷が答える。

「えっ…」

「どうした。何か変なこと言ったか？」

「い、いや何も…」

紫安が少し照れながら言う。

「？変なやつだ…」

(なんでそんな胸キュンゼリフを素で言えるのよ…)

紫安は残念に思った。

そんなやり取りをしているうちに、不思議な場所についた。

とても広い場所で真ん中に湖のようなものがある。

「なんだ…ここは？」

「とても広いね」

氷は湖を見にいった。

紫安はライトで壁を照らして見ている。

「！！なんだ…あれは？」

氷が湖の奥深くに何かを見つけた。

「えっなに？」

紫安が氷の所へ行く。

「！？なにあれ…」

二人は見た。湖の奥にあるものを…

「人…だよなあれは」

「…たぶんそうだね」

二人は湖の奥に人を見た。

どうしてこんなところに人がいるのは解らなかった。

「死んでいるのか？眠っているようにも見えるが…」

氷が言う。

紫安は

「まさかあれが先祖様なんじゃ…」

と言った。

そんな馬鹿な。

氷は最近驚いてばかりだ。

しかし驚いてばかりいるわけにはいかない。

両親の仇を取るには先祖の力が必要なのだ。

「しかしどうやって起こせばいいんだ？まさかなにかしらの儀式をしろっていうんじゃないあねえよな」

「それなら壁に書いてあるよ。」

「儀式が？」

「いや違うよ。ほら、」

とって紫安は壁を照らす。

??????????

メモの字によく似た文字が壁に大きく刻みつけられていた。

「またへブライ語か？」

「そうだよ。意味は 我に触れよ だって」

「 我に触れよ だって？まさか、湖のあの人にか？」

「たぶん……」

湖はかなり深かった。

その底にあの人は居る。

そんなところまで潜れるのか？

仮に潜ったとしても、戻ってこれるのか？

様々な疑問が氷の頭をよぎった。

「やめとこうよ氷君。酸素ボンベとかなないとあの深さは無理だよ」

紫安の言うようにこの湖はかなり深い。

潜って戻ってくるには不可能だろう。

しかし、もう上に戻る術はなさそうだ。

「……やるしかない」

氷は決心した。

「え……？無理だよ氷君！！お願い、お兄ちゃんまで死なれたらあたしは……」

「俺がなんとかあの人に触れてくる。もし俺が戻らなかつたら…後は頼む」

そう言い残し、氷は湖の中へ飛び込んだ。

「お、お兄ちゃんっ!!」

湖の水は冷たい。

しかし、体が冷えてしまわなかなどという心配などしている暇もない。

底に人が見える。

「あと少し…でももう息が…!」

氷の息はもう長く持たない。

しかし、あと少しで人に手が届く。

氷は必死に潜っていく。

「よし…もう届く。何か起きてくれ!!」

そして人の手に氷は触れた。

すると、眩しい光が人から放たれた。

氷は安堵した。

「…ああ、良かった。何か起きてくれて…ガボッ!!」

氷の息はもう持たなかった。

「紫安…すまない。後は任せた…」

そのまま意識はとおのいていった…

俺は何をしたんだっけ…ああ思い出した。

先祖を起こすため湖に飛び込んだんだ。

それから息が持たなくなつて…死んだのか?

まだ仇をとれていないのに死んじまつたか…ああ、なんてみつともないんだろう。

…だれかを呼ぶ声が聞こえる。

まさか紫安か?俺はまだ死んではいないのか?俺は…

氷はそつと目を開ける。

「お兄ちゃん!?気が付いたのね!よかつたよお…」

紫安が泣きながら氷を見下ろしている。

「俺は…死んでいないのか…助かったのか？どうやって…」
すると紫安の後ろから声がした。

「僕の治癒系の魔法で救いました。青年、よく僕を目覚めさせてくれたね。感謝します」

氷と同じくらいの年齢と思われる男性がいった。

「お、お前は？」

と氷が聞く。

男性は答えた。

「僕は旧氷堂家当主及び、魔術師氷堂救蘭です」

彼こそが氷たちの探し求めていた者、氷堂救蘭だった。

第三 秘密の湖（後書き）

やっとのことで書く時間ができました。一か月以上もかかってしま
い、
すみませんでした。

第四 魔術師へ氷堂救蘭

「僕は旧氷堂家当主及び、魔術師氷堂救蘭です」
湖の底にいた人からそう言われた。

まさか本当に先祖が蘇えったのか？

「あなたが…俺たちの先祖なんですか？」

氷がすかさず聞いた。

「ええ、そうですよ。長い話になるんですが、早くここを出ましよう。青年とそちらの娘さん」

救蘭からそう言われた。

「な、何ですか？それにここから出るのはもう無理なんじゃないかな。穴も登れないし」

紫安が聞く。

「まず一つ、僕が目覚めたことにより微弱な魔力を発しました。それによりこの付近の魔法使いが

僕の魔力を探りに来るかもしれませんが。もう一つ、ここを出る方法は簡単です。

飛んじゃえばいいんですよ」

「な、なんだって？」

魔力が漏れ出てほかの魔法使いが来る？

ここを脱出することは空を飛べば簡単？

すぐには信じられなかった。

「話せば長くなるといったはずですよ。さ、早く行きましょう」

そういつて救蘭は氷たちが落ちてきた穴のほうに向かっていった。ついていくしかなさそうだ。

氷と紫安は後を追った。

穴の下に着き、氷は訊いた。

「それでここからどうするんですか？」

「こうするんです」

すると救蘭は指をバチンと鳴らした。そして

「我に素晴らしき跳躍力を与えよ」

と唱えた。

すると彼の足が銀色に光り輝いた。

「召喚魔法って言うものです。では、行きますよ！」

彼は二人の腕を掴み、飛んだ。

「う、うわああ！」

二人は驚き、同時に叫んだ。

見る見るうちに穴を登っていく。

そして遂に地上にたどり着いたと思った。

しかしどんだんに飛んでいき、神木の天辺まで行ってしまった。

「おっと、少々高く飛びすぎましたね。やはり寝起きのときは力の

融通がききませんね」

そういつて地面に戻してくれた。

「失礼しました。怖かったですか？」

「いや、いきなり高いところは無理だった……」

「お兄ちゃん高所恐怖症だからね……」

氷は顔を青くしている。

彼にとつて、高い場所は本当に無理だった。

「クツクツク！すみませんね。笑いごとじゃあないかのもしれませ

んが、

あなたの顔ものすごいことになってますよ」

「あはは！ほんとだあ」

「う、うるさい……」

怒ることもできず、二人に笑われるだけの氷であった。

「さて、本当に笑っている場合じゃないんですが……ククツ！早く

この辺りを離れましょう。」

そのうちに魔法使いが……」

「それは俺様の事かい？」

救蘭が話している最中に、救蘭とは違う声が聞こえた。

「…来てしまったようですね。魔法使いが！」
すると救蘭は上を見た。

紫安と氷も上を見てみると、人が宙に浮いていた。

「さすがにもう異例のことでは驚かないよな」

「そうだね」

氷と紫安が言う。

すると人が下に降りてきた。

男性のようだ。

「こんな所にガキが三人、しかし真ん中のお前は魔力を持ってんよな？」

「ええ。持っています。あなたは誰ですか？悪い方ですか？」

「ンン？俺か？俺の名は谷中毅やなかぎいち。いい人だぜ。少しほかの魔術師をぶち殺して魔力を奪ってるだけのなあ」

「…そうですか。残念です。今の時代でも、やはり悪魔はいるんですね」

「そういうことよ。だから、お前も死んでもらおうか！！」

男はそういうと、魔術の術式を唱えた。

「氷の使い魔よ我に凍てつく氷の力を与えよ！」

男がそう唱えると、男の手に凄まじい冷気が集まった。

そしてそれを救蘭たちのほうにはなつた。

「凍てつく氷の力をくらいな！」

それはレーザー光線のようにはなたれ、救蘭は二人を掴み、かわした。

氷の光線は神木にあたり、木全体が氷に包まれてしまった。

「ハッハアー！どうだこの威力は？俺の氷魔法に勝るものはない！」
するとまた氷のレーザーを撃ってきた。

しかし救蘭は動かない。

「なにをやってるんだ！？よけないと危ないぞ！」

氷が言っても動かず、光線の来るほうに手を伸ばしていた。

危ないッ！！そう思った氷は目を瞑ってしまった。

すると、ガキン！というものすごい音がした。
…何が起きたんだ？そう思い目を開けてみる。
目の前には救蘭がいた。

救蘭は男が撃ってきた氷のレーザーを、魔法陣のようなシールドで受け止めていた。

「まったく…僕はともかく後ろの二人までやられると困るんです」

「な…なんだと！俺様の魔法を防ぎやがった！」

男はたいへん驚いていた。

「じゃあそろそろ反撃といきましょうか」

救蘭はそういつてから術式を唱えた。

「氷を司る神よ我に氷の力を与えよ！」

すると救蘭にも同じように手に冷気が集まった。

しかし、あの男を上回る強大な力を持っているように見えた。

「どうです？あなたと同じ氷魔法ですよ」

「な、なんだその魔法は！？俺の魔法よりも強力過ぎる！」

「さて、氷漬けにされる前に何か言うことはありますか？魔術師谷

中毅一さん？」

救蘭が男に問う。

「お前はいつたい何者なんだ！？」

「僕ですか？僕は旧氷堂家当主及び、魔術師氷堂救蘭です。じゃあサヨウナラ。」

地獄に行っても覚えていてくださいね」

そして手に溜めていた冷気を全て男に放った。

「ぐ、ぐわああっ！！」

そしてあとには氷漬けにされた谷中以外何も無かった。

第四 魔術師へ氷堂救蘭（後書き）

また遅くなってしまいました。ほんとにすみません。
これからペース上げていきます。たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4923v/>

俺の先祖は魔術師だ

2011年11月13日18時49分発行